

大阪YMCA 125年の歩み (1)

キリスト教禁制の高札が撤去されてから10年後の1882年6月4日、天満教会仮会堂に集まった200名の教会青年たちにより大阪YMCAが発会した。その中心となった人たちはいずれも少壮気鋭の牧師だった。会の名称は「大阪基督教徒青年会」。設立の目的は「キリスト教の真理を拡張し、併せて社会の道徳を改良すること」。会員は「キリスト教徒」に限られ、「教会外の者または外国人は会友」とされた。このようにして世界のYMCA運動に繋がるキリスト教団体としての精神的基盤が確立されたのである。

大阪YMCAは発足の2年後に後の災害救援活動に繋がる河内大水害治療事業も行っているが、当初の活動は設立目的を直接反映するような宗教演説会や学術講演会が中心だった。まだ会館もなく、今日のような洋風の建物もほとんどない当時のことゆえ畳敷きの芝居小屋や能舞台などが会場となったが、毎回700人を超える聴衆があったということである。

設立当初はキリスト教徒を中心とする会員団体に過ぎなかつた大阪YMCAであるが、早くも4年後の1886年には東洋初のYMCA会館を建設、直ちに体育事業を開始し、1893年には英語学校の前身である青年会夜学校を開校した。そして1910年には財団法人の認可を受け法人格をもつ事業体となった。大阪高等予備校が開校されたのもこの年だった。今日の大阪YMCAの事業と運営の基盤はこの頃に確立されたと言ってもよいだろう。なお、初めて有給職員が採用されたのは発会から20年後のことであり、それまでは日常の会務と事業運営のすべてが無給の会員たちによって担われていた。その後、事業の発展に伴い主事をはじめとする職員体制が強化されることになるが、草創期から約30年の間に「法人格をもつ事業体であるが本質的には会員組織による運動体である」というYMCAとしての自己理解が定まり、それが今日まで継承されてきたのである。

明治、大正から昭和初期にかけて、大阪YMCAの活動は言論、教育、文化、体育の各分野でさまざまな発展を遂げ日本の近代化に貢献したが、特に昭和に入つてからは度重なる戦争と軍国主義が台頭する中で次第にその活動が制約されるようになった。(川村勇二・協力会員)



青年会館落成式後会館前で(明治19年)

松尾台幼稚園

猪名川町保健衛生推進協議会
功労賞を受賞

この度、YMCA松尾台幼稚園が猪名川町より、多年にわたる地区衛生活動向上の功績が認められ、「平成19年度猪名川町保健衛生推進協議会功労賞」を4月28日(土)猪名川町文化体育館に於いて受賞いたしました。雨の日も雪の日も、暑さ厳しい日でも幼稚園周辺の歩道を清掃されているYMCAスタッフの野村政子さん、中川好子さんの働きが今回の受賞に繋がりました。お二人の働きに感謝いたします。

「VISION2010 (ネットワーク型福祉社会)

への地域YMCAの取り組み

—土佐堀YMCAと南YMCAからの報告—

土佐堀YMCA館長 神田尚人
南YMCA館長 魚住秀雄

大阪YMCA「VISION2010」が、各地域YMCAでどのように意識され、取り組まれているかについてのお話を頂きました。

◇土佐堀YMCAの取り組み

神田：新しい「大阪YMCAの使命」と、VISION2010が策定された時は、ちょうど土佐堀が地域Yとしての活動を再開しよ



うとしていた時期と一致していました。当時は土佐堀YMCAとしての固有の課題があり、一つには、いかに地域に存在感のあるYMCAになつていけるか、ということ。もう一つは土佐堀YMCA総体としての会員活動をどうVISION

2010の視点からまとめあげていくか、ということでした。そのなかで、運営委員会が再開すると間もなく、地域活動委員会をはじめとする3つの小委員会を立ち上げました。この中で地域活動委員会は、現在土佐堀YMCAが所在する地域との関わりを強く持つていきます。例えば「西船場納涼祭」では従来は地元の方々が夏祭りとして多少舞台などを用意して行っていました。地域に越してきて大人と子どもが行事に参画できないという状況がありました。そこに地域活動委員会が継続して行っている「わいわい」もげきじょう」として屋外での映画上映を持ち込んだり、土佐堀YMCAのユースリーダーが子どもコーナーを設けたことによつて、参加者が量的にも質的にも拡大しました。そしてこの地域の課題である旧来の住民と新しくマンションなどに越してきた住民の交流がないという状況に対して、YMCAが交流の場を提供し、そこにある種のネットワークが生まれてきている、ということです。YMCAが加わつたことによつて輪が広がり、参加が広がつたということ、地域の町会長さんをはじめとする多くの方たちからYMCAは今非常に高い評価を受けています。

◇南YMCAの取り組み

魚住：南YMCAは以前から会員活動が活発な地域YMCAです。これはYMCAの会員活動も事業もYM

CAの理念を実現するために行つていきます。会員活動は会員やボランティア中心、一方事業は職員中心で行つていくというふうに思われがちですが、目指す方向は同じである、という認識を持つています。南YMCAには運営委員会の基に7つの小委員会がありま



す。南YMCAにはエンジェル水泳という知的障がいのある子どもたちのための水泳のプログラムがあります。小委員会の一つである「福祉」委員会はウエルネス事業部と共にその子どもたちを対象としたキャンプを実施しています。また他の小委員会では、日本語学校留学生、ながい保育園やYMCA学院高校と関わっています。今年の南YMCAの事業強調点は、参加会員、生徒、保護者との有機的な関係を強化し、各事業と小委員会を中心とした相互の連携により活動を推進していくことです。ですから、今年度の各小委員会の活動は、各々が単独に展開するのではなく、南YMCAの各事業部や他の小委員会とどう繋がるのかという視点を必ず持ちましょう、というのがポイントになっています。これはVISION2010にある連関システムに大きく関係していると考えています。

この報告は、去る4月12日に行つた南出和余常議員・神田・魚住両館長の対談を基にしております。対談全文は大阪YMCAホームページでご紹介する予定です。併せてご覧下さい。

魚住：VISIONの先が見えるような働きかけになればと思います。

◇YMCAの考える「コミュニティ」の二面性
魚住：地域という視点で見るときに「コミュニティ」をどう捉えるか、ということとは重要です。コミュニティには地理的なものと、興味、関心に基づくものがあります。地理的な地域コミュニティとの関わりについては今後の南YMCAの重要な課題の一つです。しかし、人びとが持つていく興味、関心を基にして、YMCAが一つのコミュニティとしてまとめあげていく、それがネットワーク型福祉社会に繋がるという認識を南YMCAは持つていきます。

神田：地理的なコミュニティと、現代社会の課題である興味、関心のコミュニティの両面をもつていくということがYMCAの懐の深さにも繋がつていくだろうと思えます。

地域YMCAにそれぞれの歴史があつて、さまざまなことをされていられると思いますが、今回の話は、全体を元気づける基になる働きかけになればいいですね。